

## 特集

# コロナ禍の学校と子ども

コロナ禍騒ぎは、今までの私たちの政治・経済・生活・教育、外国との交流に関して多くの点で転換を迫るものとなっている

新型コロナウイルスが猛威をふるい始めた2020年2月頃から、幼小中高大、特別支援、専修・専門学校全ての教育機関では、その対応に追われてきた。その様子の一部について当雑誌132号掲載の「教育とは？ 学校とは？ 真っ先に子どもたちが犠牲になった春」「そのとき学童保育は子どもたちの安全・安心な居場所になったか」「一人ひとりの『ねがい』をつなぐ」論文（2020年7月）で紹介した。

あれから10か月が経過した。この間、多くの議論が巻き起こるとともに、コロナ禍の下での教育活動が営まれてきた。そして、課題が徐々に見え

・ 感染予防のための様々な手立て、保護者・地域・行政との協力の在り方

・ 臨時休校により減少した（今後、臨時休校する可能性を含め）学習時間を補うため、行事等の削減や校時表の見直し

・ 「With コロナ」を見据えての学習指導計画や実習計画の見直し

・ 少人数学級の充実等、きめ細かな学習活動を可能とする制度作り

・ 遠隔教育を取り入れた学習形態の工夫

・ 生徒の健康と感染予防に留意しながら、達成感や満足感を保障することの出来る生徒会活動等々。

そこで、133号では、10か月に渡る学校現場の取組を紹介するとともに、諸課題を解決するための方向性を探ってみることにした。

編集部